

『いのちを持つため』(ヨハネの福音書 3章 11-21節) 2021.6.13.

<はじめに> 10節以降、黙り込む教師ニコデモにイエスが語られた箇所です。それが15節までか、21節までか、意見は分かれます。「生まれなければ…」(3,5,7)と語られたことは、「永遠のいのち」(15,16)と言い換えられています。いのちに関わることは、常に最優先の必須事項です。

I 人の子の証し(11-15)

①地上のこと(11-12)

二人の会談なのに、「わたしたち」「あなたがた」(11,12)には誰が加わっているのでしょうか。イエスは霊的・人格的刷新を語られ、聖書にもその体験・見聞の証言が数々あります。しかしニコデモはあり得ないこと(9)と受け入れませんでした。それは彼だけではありません。

②天上のこと(12-13)

12節後半はイエスの嘆きですが、なおも語り続けられるのはなぜでしょう。天は神の領域支配で、そこに至った人はいません。「しかし、天から下ってきた者、人の子は別です」と言われます。それは誰のことでしょう。そのような者がいるなら、証言を受け入れますか。

③上げられる人の子(14-15)

14節は民数記 21:4-9の故事を引用して、モーセが上げた蛇と人の子を重ね合わせます。「蛇を仰ぎ見ると生きた」ように、人の子を信じる者はみな、永遠のいのちを持つのです。人の子が天から下るとは、また上げられるとは、具体的にどういうことなのでしょう。

II ヨハネの証し(16-21)

①神は…愛された(16-17)

世は人間とその世界です。神はこれを受容されました。愛が神の本質・性質です。神の愛はどう表されましたか。その目的は何ですか(消極的と積極的があります)。その目的を人が享受するためにどうすればよいのでしょうか。「愛された」と過去形なのは どうしてでしょう。

②人々が…愛した(18-20)

神の愛は「光が世に来ている」と現在形です。それは人々の愛の歪みを投影します(19)。自分の行いが悪く、明らかにされる光を憎み、拒絶し、そのまま闇に留まります。さばきとは、彼の言うとおりに、為すがままに放置されることです。モーセの故事にも見られます。

③真理を行う者(21)

揺るがない神の愛を、神が望まれるように受け入れることが真理です。自分の心と生活を神の愛の光に照らされ探られることへと進み出る者を、神は滅ぼされず、むしろ神とともに生きる永遠のいのちを与えられます(生まれる=be born:受動態)。

<おわりに> いのちは交わり・活動・成長と直結します。神の前に生き、人らしく愛に生きるためにイエスが語られる天から与えられる永遠のいのちは必須です。神は御霊によって人にいのちを吹き入れようと、御子イエスを遣わされました。十字架は信じ見上げるしるしです。(H.M.)